

2015年2月4日

三菱地所株式会社
代表取締役社長 杉山博孝 殿

一般社団法人 日本建築学会関東支部
支部長 長谷見 雄二

みずほ銀行前本店ビルおよび銀行会館・東京銀行協会ビルの
保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴社におかれましては、東京都千代田区丸の内1丁目所在の「みずほ銀行前本店ビル」、「銀行会館」、「東京銀行協会ビル」を一体的に建て替える「(仮称)丸の内1-3計画」を実施すること、新聞記事で拝見いたしました。

よくご存知のように、みずほ銀行前本店は、文化勲章受章者で日本近代を代表する建築家・村野藤吾の設計によって1973(昭和48)年に旧日本興業銀行本店として建設された建物で、濃褐色の花崗岩で外壁を一様に覆った地下5階、地上15階建ての個性的な外観が特徴的なオフィスビルであり、また隣接して建つ銀行会館・東京銀行協会ビルは、三菱地所設計の設計により1993(平成5)年に建設された高層オフィスビルで、低層部の一部に既存建物である旧東京銀行集会所(1916(大正5)年、横河工務所(担当:松井貴太郎))を部分的に取り込んだ、都心部における近代建築の保存活用の初期の事例として有名な作品です。

それぞれの建築の有する価値は別紙「見解」に記した通り、1970~1980年代の丸の内・大手町地区の都市再開発において主要なテーマであった高層化(高さ制限の撤廃)や「歴史的建造物の保存」といった課題に対し、場所性や設計者の独創性、景観を重視したオフィスビルのあり方を提示した初期の代表的な建物として高い歴史的価値を持つものであります。これらの建物は、明治期(三菱一号館)や大正期(東京駅)、昭和初期(日本工業倶楽部会館、明治生命館)の建物に続く、1970~80年代の丸の内・大手町地区を象徴する建物と位置づけ、この地区の歴史を後世に伝える存在として、その価値を継承していくことが重要と考えられます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、この建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2015年2月4日

みずほ銀行前本店ビルおよび銀行会館・東京銀行協会ビルについての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部
歴史意匠専門研究委員会
主査 藤田 康 仁

A) みずほ銀行前本店ビル (旧日本興業銀行本店)

1) 建物の概要

東京都千代田区丸の内1丁目所在のみずほ銀行前本店ビルは、1973（昭和48）年12月に日本興業銀行本店として竣工し、翌1974（昭和49）年1月に開業した鉄骨および鉄筋コンクリート造地上15階、地下5階のオフィスビルで、竣工時の建築面積は約6,498㎡、延床面積は約75,782㎡である（現在は敷地面積が約6,925㎡、延床面積約75,994㎡）。設計は村野藤吾が主宰する村野・森建築事務所、施工は大林組が担当した。敷地は日比谷通りを挟んで和田倉濠に面する区画の東側（西側は東京銀行協会ビル）を占めて南北に細長く、敷地北側を永代通り、西側を仲通り、南側を東京駅から日本工業倶楽部会館や東京銀行協会ビルの前を通って和田倉濠に至る歴史的建造物が立ち並ぶ通りのそれぞれに面している。

建物の平面は南北に細長く（154m）、仲通りに面する東面のほぼ中央にメインエントランスを設けている。オフィス空間は敷地の東側と南側に寄せて配置され、隣地に面する西側には階段室などのコアを集中させ、交通量の多い北側（永代通り）には設備配管を集約させた吹抜けを配するなど、不整形な敷地形状を巧みに利用した合理的な平面計画となっている。内部は1階を営業室、その他の階を事務室としてオフィス空間を広く確保しつつ、12階には村野特有の意匠を凝らした貴賓室を南側の通りに面して設け、銀行本店としての風格を示している。建物の高さは軒高が58mと周囲の建物（31m）の約2倍の高さがあり、外壁は濃褐色の花崗岩（鏡面仕上げ）で一様に覆われているが、仲通りに面する東面や南面では窓を縦型のスリット状に開けて立面を細かく分節することで歩行者への威圧感を和らげ、近代的かつ古典的な風格を備えたデザインとして丸の内の景観に調和している。

2) 歴史的価値

①建築意匠上の評価／合理性と場所性・記念性をともに表現した高層オフィスビル

当該建物は、同年に竣工した東京海上ビルディング（前川國男設計、軒高100m、25階）とともに、丸の内地区においてオフィスビルが高さ規制（31m）から容積率制度へと移行する1970年代に建設された高層のオフィスビルであり、その外観意匠や素材の扱い、建物の配置計画には、建物を高層化（100m）して足下の広場を充実させた東京海上ビルディングとは別の手法で丸の内地区における高層オフィスのあり方を提示しようとした設計者の姿勢がうかがえる。すなわち、ここでは外壁の素材に濃褐色の花崗岩を貼ったプレキヤス

トコンクリートとアルミの窓枠を交互に用いることで建物の記念性を現代技術によって表現し、東側ではそれが道路境界に寄せて建てられた建物の壁面においてスリット状に繰り返されることで歩行者への威圧感を和らげ、高層建築でありながら目抜き通りである仲通りの街路景観を連続的に継承することに成功している。一方、日本工業倶楽部会館など歴史的建築が並ぶ南側の立面は、縦型スリットに加えて両端部に袖壁を加えることで立面に古典主義的な雰囲気を与え、東京駅からお濠端に至る道路沿いの他の歴史的建物と巧みに調和させている（12階の貴賓室はこの面に配置）。そして、交通量が多く幅員の広い永代通りに面する北側では、マッシブな大理石の壁面をカンティレバーで地上面から浮かせ、また端部のスリットを象徴的に見せることで、そこが仲通りの入り口であることを造形的に表現している。

室内意匠については、1階の営業室と各階の事務室は機能的な意匠・材料で近代的なオフィス空間としてまとめられているが、12階の貴賓室と2つの階段室（1階と地下1階、12と11階を結ぶ階段）には材料・意匠に凝った村野特有のデザインが施され、銀行本館としての風格が表現されている。すなわち、12階に設けられた貴賓室（来賓室）は、壁は緩やかな曲面が連続し、デザイナーの上野リチによるデザインのクロスが貼られ、一部は繊細な装飾の陶器で覆われている。天井は花卉のような輪郭と緩やかな凹凸で仕上げられ、FRPで花卉のようにデザインされたカバーが取り付けられた電燈が配されている。そして花卉のモチーフの絨毯で覆われた床の上には、村野がデザインした特注の椅子やテーブル、キャビネットが配されている。材料、デザインともに、高度な技術に支えられた工芸品のようになっている。そして11階から12階にかけて吹き抜け空間が作られ、白い大理石のテッセラ（細片）で仕上げられた湾曲する壁の間に、白く塗られた鉄骨の自由曲線による螺旋状の階段が設置されており、明るく柔らかく落ち着いた独自の空間を創り出している。同様の階段は、1階の営業室と地下1階の間にも設置されている。

以上のように、この建物では現代の高層オフィスビルのあり方として、近代的なオフィス空間を広く確保しつつも、銀行本店としての風格や「丸の内」という場所性にも配慮した建物外観・室内の意匠表現に特徴があり、そこには合理性とともに場所性や周囲の景観への配慮も重視する設計者の考え方が反映している。

②設計者としての評価／丸の内・有楽町地区の村野藤吾作品としての価値

本建物の設計者は村野藤吾（1891-1984）である。村野は、1891（明治24）年に佐賀県に生まれ、1918（大正7）年に早稲田大学建築学科を卒業後、大阪の渡辺節が主宰する渡辺節建築事務所に入所し、1929（昭和4）年には大阪に村野建築事務所を開設し（1949年に村野・森建築事務所に改称）、商業施設やオフィスビル、住宅、学校施設、美術館など、全国各地で数々の建築の設計を手掛けた、近代日本を代表する建築家である。その作品のいくつかは日本建築学会賞や日本芸術院賞を受賞している。また村野は、1955（昭和30）年には日本芸術院会員となり、1967（昭和42）年には文化勲章を受章するなど、日本を代

表する建築家としてよく知られている。日本建築家協会会長、イギリス王立建築学会名誉会員、アメリカ建築家協会名誉会員としても活躍した。

村野の建築作品は、2005（平成 17）年には宇部市渡辺翁記念会館（1937 年竣工）、2006（平成 18）年には広島世界平和記念聖堂（1954 年竣工）、2009（平成 21）年には村野が増築の設計を担当した日本橋高島屋（1952 年増築）が、それぞれ国の重要文化財に指定された。また、村野が改修の設計を担当した迎賓館（旧赤坂離宮／1974 年改修）は近代の建築として初めて国宝に指定されるなど、近年村野藤吾の作品は文化財としての価値が高く評価されている。村野藤吾ほど多数の建築作品が国の重要文化財や国宝に指定されている近代の建築家は他にいない。

村野は渡辺節建築事務所に在職中、前身の日本興業銀行本店（1923 年竣工）の設計を担当しており、その調査としてアメリカ合衆国（シカゴ、ニューヨーク）に長期滞在し、帰国後、古典主義を基調とする米国風のオフィスビルを設計した。村野が本建築の設計者となった背景にはそうした実績があったと考えられる。

また、丸の内から日比谷にかけての地区には、村野藤吾の代表作である読売会館（旧そごう百貨店東京支店、1957 年）、日本生命日比谷ビル（日生劇場、1963 年）が現存しており、本建物も含めると、村野藤吾の 1950 年代、1960 年代、1970 年代の代表作が揃って現存している東京では稀有な地域となっている。駅前の不整形な敷地形状を外観意匠にダイナミックに表現した読売会館、お濠端の美観地区にロマネスク調の外観意匠で上品に仕上げた日本生命日比谷ビルは、いずれも現代的な構法・材料と周囲の景観との連続性という点で、本建築と共通する設計態度をうかがうことができる。以上のことから、本建築は東京の都心部に建てられた村野藤吾の 1970 年代を代表する作品として、重要な建築史的価値を持つと考えられる。

B) 銀行会館・東京銀行協会ビル（旧東京銀行集会所）

1) 建物の概要

東京都千代田区丸の内 1 丁目所在の銀行会館・東京銀行協会ビルは、三菱地所設計の設計により 1993（平成 5）年に建設された高層オフィスビルで、低層部の一部に既存建物である旧東京銀行集会所（1916 年、松井貴太郎）を部分的に取り込んだ、都心部における近代建築の保存活用の初期の事例として有名な作品である。旧東京銀行集会所の建物は、イギリスのヴィクトリアン・カントリーハウスのイメージを持つ優美な建築として知られ、かつては東京都がまとめた「新東京百景」にも選ばれた丸の内地区のランドマークの一つであった。

旧東京銀行集会所の建替えに際しては、1987（昭和 62）年 7 月 15 日に日本建築学会から会長名で東京銀行協会に保存要望書が出され、その後、東京銀行協会と本会、東京都生活文化局での意見交換を踏まえ、内部の一部の部材を再利用し、また外観の一部を再生しつつ背後に高層ビルが建設されたことが知られている。再利用された当初建物の部材につ

いては、内部の大階段と列柱、外壁の装飾彫刻などが現在の建物に再利用されたと伝えられているが、実態については詳細な記録がなく、不明な点が多い。

2) 歴史的価値

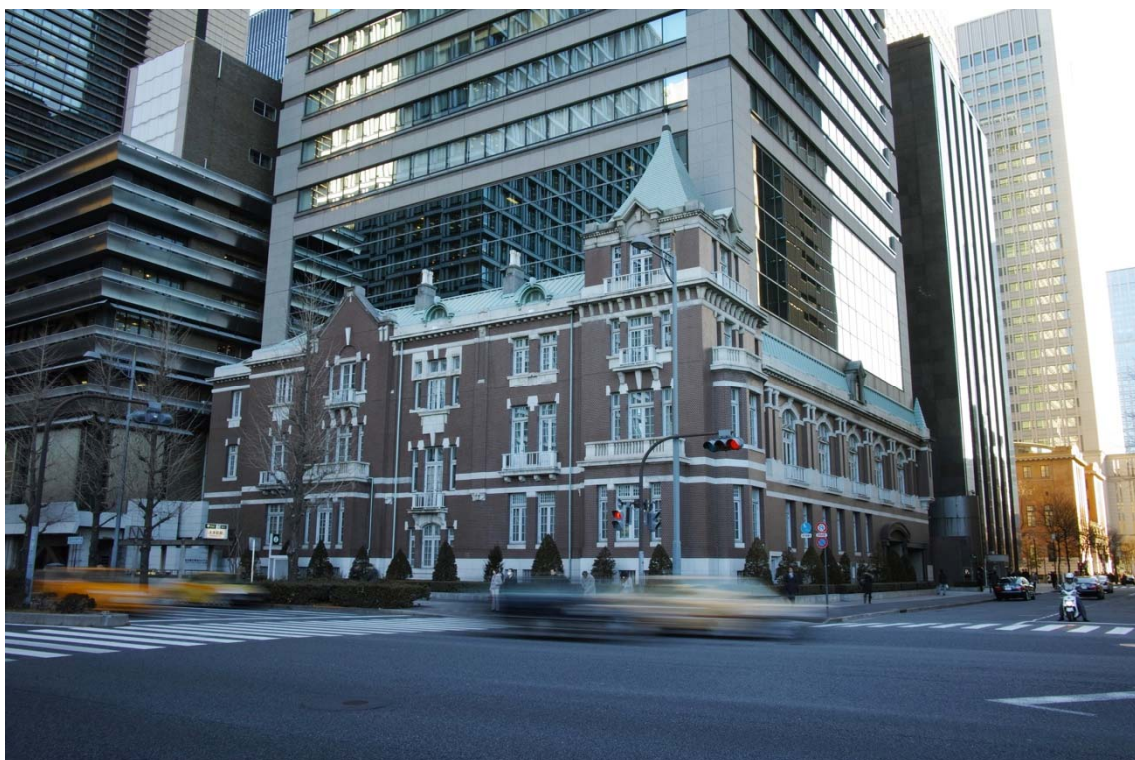
本建築の歴史的価値は、都心部の再開発における歴史的建造物の保存活用と土地の高度利用の両立というテーマの、丸の内地区における最初期の事例という点にある。建設当時の様子を伝える記事によれば、当初は既存建物の一部を曳き屋して再利用することが検討されながらも、予算不足などを理由に実際には新材料にて新築再現（一部は創作）されたと記されており、文化財保存の手法としては満足のものではないことがこれまでもたびたび指摘されてきた。

しかし一方で、歴史的建造物を保存しつつその背後に高層オフィス棟を建設する手法は、本建築の竣工以降、1995（平成7）年竣工の第一生命館（原設計・渡辺仁、1938年）+DNタワー（K.ローチ）、登録文化財制度を活用して2003（平成15）年に竣工した日本工業倶楽部会館（原設計・松井貴太郎、1920年）、本館を重要文化財として保存し背後に高層オフィス棟を建設した2004（平成16）年竣工の明治生命館（原設計・岡田信一郎・岡田捷五郎、1934年）、東京中央郵便局（原設計・吉田鉄郎、1931年竣工）を一部保存活用して背後に高層オフィス棟を建設したJPタワー（2012年竣工、保存棟も含めての開業は2013年12月）へと続くものである。よって本建築は、1980年代に始まる丸の内地区のテーマ「歴史的建造物と土地の高度利用の両立」の初期の事例として歴史的意義があり、ゆえにその当時の議論の経緯や実際の工事で採用された技術・構法などについてはあらためて詳細な資料調査が行われることが望まれる。また、旧建物の当初部材は大階段や列柱、外壁の装飾彫刻などしか残されていないと考えられるが、先達が保存活用してきたこれら当初部材についても、できれば再々利用することが望ましいと考えられる。

現状写真



北側（永代通り）側の立面（マッシュな大理石貼りの配管スペースと足下の公開空地） 撮影：藤田康仁



和田倉濠から見た東京銀行協会ビルの南・西面（奥にみずほ銀行前本店が見える） 撮影：藤田康仁



東側（仲通り側）の立面（縦型スリット）



南側の立面（古典主義的な均整）



北側（設備ダクトスペース）



旧銀行集会所（南面） 撮影：藤田康仁（4点とも）



みずほ前銀行本店 12階の貴賓室内観

撮影：笠原一人



みずほ前銀行本店 12階の貴賓室から11階に下りる階段

撮影：笠原一人